

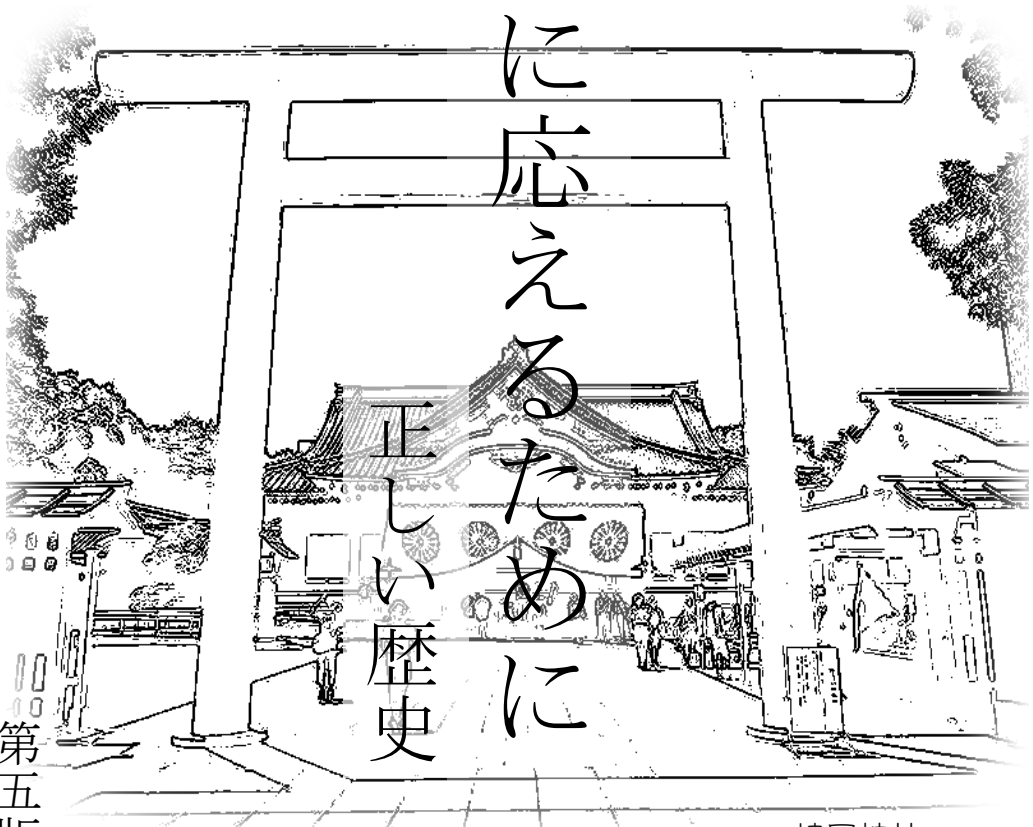
平成三十一年さくら祭

ご英霊の思いに
応えるために

正しい歴史

第五版

靖国神社



戦後の自虐史観から、日本人が知らなければいけない歴史を、封印され今日まで来しました。ご英霊はさぞ悔しい思いをされているのではないかと思うのです。

そんな思いからこの冊子を皆様にお届けしております。私はジャーナリストではありませんし、歴史家でもありません。田舎の神職です。真実を調査する資金もありませんし、ネットワークもありません。只々市井の図書等から、歴史書を紐解くに不思議な事が見えてきます。今回はそのような面を含めて紹介したいと思います。

今回は正しい歴史というテーマで、まず幕末から明治を見てみたいと思います。年代で言えば一八五〇から一九〇〇年頃といった時代でしょうか。この頃の世界は、今我々の知る世界とは全く異なっていたということです。

そして歴史を見ると、小さな事件に、目を奪われないようにしなければいけません。大きな流れその流れは何なのか、小さな事件に目を奪われると、歴史の本流がわからなくなります。そのような点を考慮し学んでみましょう。

当時の世界はどうなっていたか、大まかに見ますと、西欧の独立国と北米アメリカ、カナダ、そして日本、中国の一部が独立しており、アフリカにはエチオピア、東南アジアではシヤム（現在のタイ）が弱々しく独立。この時代になると、十五、六世紀覇権を誇っていたポルトガル、スペインの力は低下し、植民地化されていた南米では各国が独立に動いていた状況で、世界の覇権の中心は、イギリス、アメリカとなっていました。

弱々しく独立のエチオピアには、西欧人が耐えられない風土病がありその為植民地にされず、インドシナ半島のシヤムは半島の西はイギリス、東はフランスの植民地に挟まれたのが植民地にされない理由だったようです。

我々は、学校で、何となく西欧人は、自由を愛する正義の人という、イメージを植え付けら

れていないでしょうか。しかし、当時は、今で考えれば非常識なことが行われており西欧人が、他国（他国と言っても、部族が治めている王様の国といったほうがいいと思います）を自由に侵略してよいというのが当たり前の考えでした。

その最たるものが、一八八四年ベルリンに西欧列強が集まって、事もあろうにアフリカ大陸の分割を話し合う、アフリカ分割会議です。結果、アフリカには当然原住民が暮らしておりながら前述のエチオピアを除いてものの見事に西欧列強の植民地にされ、豊富な資源を搾取されたのです。

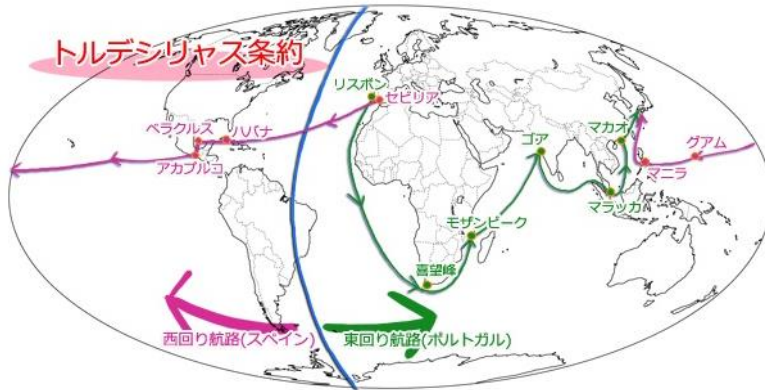
例として、フランスはエネルギーの大半を原発に頼っています。なぜか？不思議と思いませんか。どこからウラン燃料が供給されているのでしょうか。フランス領マリにはウランが産出します。マリは独立しておりますが、その利権が今もフランスにあり、この歴史的背景がフランスのエネルギー事情を支えていることを知るべきでしょう。アフリカの各国は表面上独立していますが、根底に過去の宗主国の属国のような状況で、利権を支配され、それに反旗を翻したのが、リビアのカダフィー大佐でしたが、西欧の利権の元倒されまし

た。
カダフィー大佐は、リビアの狂犬と揶揄され、日本のメデイアも西欧の尻馬に乗って報道していましたが、アフリカ各国にとっては英雄であったはずで。このことはなにかの機会にまた考えたいと思います。



さて十五世紀に始まったポルトガル、スペインによるアフリカ奴隷貿易で西インド諸島へ、労働力として供給されたアフリカの黒人。十九世紀に入ると、今度は資源を搾取すべく他人の大地を我が物にするいかにも国際会議のような形を取りながら、それが当時の正常な考え方で

あつたということを我々は頭のすみに留めて歴史を見なければなりません。



日本人からすればとても考えられないようなことですが、前述のアフリカ分割会議が初めてではなく一四九四年にトリデシリヤス条約という条約が結ばれています。(トリデシリヤスはスペインの都市名) 当時欧州は、ポルトガルとスペインが中心の大航海時代ですから、互いに喧嘩しないように、西経四六度三七分を分界線に東で新たに発見した土地はポルトガルに西の地はスペインに権利が与えられると云うもので、これを考えると西欧人には、侵略という概念は無く、他人が住んでいる土地でも、取ればそれは自分の物という考えがあるのでしよう。そこにはキリスト教の教えがあるとも言えるかもしれませんが、寧ろむじキリスト教を利用したといったほうが正しい気がします。ですから、「日本に鉄砲伝来一五四三年種子島に」と習いますが、前述の歴史を知るとなぜポルトガルがやってきたのか？スペインじゃないのかがよくわかります。その際、島の領主種子島時堯は、交渉して二丁の鉄砲を二千両(二億円)で購入。ところが日本人この一丁を分解、研究して量産したのです。器用な日本人偉い！因みに本国ポルト

ガルでは一丁七〇八十万円。いかに貿易が儲かるか。一寸脱線してしまいましたが、現在我々が今の社会で、認識している常識とは、全く異なった、考え方が当時はあたりまえであったということなのです。

結局、明治維新前の世界は、欧州人に侵略されていない所は日本と、中国（当時は清国）。しかし中国も半分くらいは侵略されていきました。

さて十九世紀末、欧州人は地図を見ながら、日本と中国がまだ我が手にない。ということをやってくるんです。東から来たのがアメリカ。北から来たのがロシア、西から来たのがイギリス。当時の徳川幕府も、鎖国を続けることができなくなり、とうとう開国ということになり、徳川幕府は倒れ明治維新となるのです。

しかし、我々の習った教科書では、江戸幕府も二百数十年続き、体制も弱ってきました。そこにペリー提督が艦隊を引き連れやって来て開国を迫った、その力に驚き幕府の力では、耐えることが出来なくなり大政奉還となった。といった記述で、開国と耳障りの良い言葉ですが植民地化が目的です。

なぜそのような記述に成っているかといえ、欧州人の歴史家からいえば、日本は極東、アメリカから言えば極西。その日本を最後に侵略しようとしたというのではバツが悪い。そりやそうでしょう。

自分の蛮行を、隠しておきたい。しかも、大東亜戦争で、日本が負けたので、日本にその罪を全て負わせておけば良いということで、GHQの元、戦後の教科書はそうのように記述され教えられてきました。そして今もって、その傾向は残っており、昨今西尾幹二氏らにより新しい歴史

教科書が上梓されたのは喜ばしいことです。

さてその蛮行ですが、アメリカ建国の前の北米アメリカ、ここには国があったわけではなく、あの広い大地にアメリカインディアンが部族として居たと言っているでしょう。広い大地に各々の部族が暮らしていた。そこにメイフラワー号にのってイギリス国教会の迫害を受けた清教徒が乗り込んでくるのです。が、アメリカインディアンは誇り高い人種であって、決して、イギリス人の奴隷にはなりません。その結果戦いを挑むのですが、弓矢では戦力的に鉄砲を持つイギリス人にことごとく殺され、その数は明確ではありませんが、数百万から千万人は殺されたと言われます。一方、ネグロイドと称される、アフリカの黒人は、性質が穏やかで、欧州人に抵抗はせず、簡単に植民地になり又スペイン大航海時代時代には西インド諸島は、スペインによってことごとく侵略され、その結果労働者がいなくなり、アフリカから黒人が奴隷として、西インドに売られる悲しい歴史となります。

一方長い歴史をもつ、インドなどは、イギリス軍が侵略する際、女性は連れて行きませんから、そこで現地女性を暴行し、即ち出来た二世に、イギリス名を与え、鉄砲をもたせ、インド人を支配するという構図にもって行くわけです。その植民地政策は、我が日本人にはとても及



イギリス人によるマムカインディアンの殺戮

ばない狡猾なもので、本国イギリス人が表面に出ないように、うまく支配するもので言葉に言い尽くせないものなのです。

オーストラリアのアボリジニも悲惨な歴史を持っており、タスマニア島におけるイギリス人の蛮行は文面にするには憚はばかれるようなものです。

ソ連時代のスターリンによる粛清二千万人、毛沢東による文化大革命の際の犠牲者四千万人、アフリカの奴隷売買千六百万人、イギリスによるインド支配によるインド人の死者千七百万人、スペインに依る南北アメリカの原住民死者千五百万人と言われております。

此れらのことを考えるに、西欧人即ちアリア人の根底には、日本人には考えられない何かがあるのでしょうか。今の日本人にはにわかには信じがたいものですが、事実であることには間違いありません。

アジア人には考えられないことです。ただ中国人には、若干一般アジア人とは異なる感覚があるようにも思います。後述しますが、一例として前政権の皇帝の墓を爆破するなど、此の点は又何かの際考えて見たいと思います。

しかし、現在欧州人は此のことをひた隠そうとします。それは当然でしょう。しかし、一部の欧州人の中に、やはり人間として良心の呵責に耐えられないという人もおり、それが書物になっておりそれを読めば現実がわかります。

以上の歴史を学ぶに、アメリカが原爆を落とし、広島、長崎合わせ二十数万人が、犠牲にな

オーストラリアの南に位置する島。民族浄化が徹底的に行われ、原住民は今全く残っていない

ったことなど、それほど心が傷まないのかもしれない。

しかし、欧州人の文化は素晴らしい物があります。芸術、音楽など、我々日本人には、及ばない優れたものがあるのも事実です。以上のことを頭に入れ、近現代史を観ることが必要でしょう。

さて、日本は建国以来二千数百年経っていますが、その歴代天皇が、殺されるということはほとんどありませんでした。ところが、世界の常識では、天子、皇帝と言われる人が二〇〇年程度の時を境に殺されるということが頻繁に起こっております。

お隣中国を見ますと、易姓革命といって、例えば清国が衰退し、蒋介石が中華民国を建国するとき、清の歴代の皇帝の墓を爆破し、遺骨から副葬品まで吹き飛ばし亡き者にする行為を行います。

しかし、この事件が満州帝国を創る時の分かれ目になります。満州国の初代皇帝は溥儀ですが、一方溥儀は清朝最後の皇帝です。この清朝の墳墓を爆破されたことに溥儀は心を痛め、日本に救いを求めます。東京裁判史観（西洋側に



愛新覺羅溥儀皇帝
(清朝最後の皇帝であり、満州国の皇帝)

3. 統治者の姓が変わる革命。中国古来の政治思想で、徳のあるものが徳のないものを倒し王朝を立てる。以前の王朝はことごとく非難される。

4. 一九〇六年、溥儀は清朝十一代皇帝 光緒帝(こうしよてい)の弟・愛新覺羅載灃(さいほう)の子として北京で生まれた。時の最高権

たった歴史)では溥儀は関東軍が連れ出して利用したと教えますが、もちろん関東軍も利用した面も有るでしょうが、全てではありません。溥儀が自分の意思で日本へ助けをもとめ保護を受けたのです。そして先祖の土地、満州に戻りたいと考え、日本の後ろ盾を得て満州初代皇帝となったのです。溥儀の家庭教師のジョンストン博士の手記にも記されており、東京裁判にも証拠として提出されていますが、当然却下されています。日本の侵略など無いことが証明されれば日本悪者の裁判自体が成立しないからです。

とこのように、我々は教科書で関東軍が溥儀を担ぎ出し満州帝国を建国と習いましたが、溥儀から進んで自分の祖先の地である満州国の皇帝についてたのです。

もちろん関東軍も、ロシアの脅威があり、是非ともその防波堤として、満州国という独立した国を作っておきたいといった思惑があったのは事実でしょう。ロシアの他国の土地を侵略し南下しようとする謀略は声を小さくし、一方的に日本の策略のみを声高に言うのは如何でしょうか。

さてその満州国ですが、名前程度はしっているが、さてどのような国だったのでしょうか。満州中央部は農業中心でしたが、周辺の草原、山岳地帯には鉄鉱、炭田、油田があり、これを利用する産業が発展しました。日本政府主導による経済政策は成功をおさめ、重工業を中心とする産業が急速に発展していったのです。

力者・西太后から皇帝に指名された溥儀は、一九〇八年に紫禁城で十二代皇帝 宣統帝(せんとうてい)として即位した。この時、わずか二歳十カ月だった。

満州国建国後、数年のうちに人口が急増します。漢族や日本人だけでなく、外国からもたくさんの人々が豊かさを求めてやってきました。なかには革命から逃れたロシア貴族や、迫害されたユダヤ人たちもいました。

代表的な企業に、南満州鉄道（満鉄）があります。鉄道を始めとして、ホテル、港湾、電力等のインフラ、映画といった幅広い経営をしていました。しかし、日本が敗戦し、わずか十三年足らずの幻の帝国だったので。

満洲はその後、支那共産党が摂取し自国の領土とします。

毛沢東はこれを狂喜し、「東三省（満洲）を手に入れたことは、支那すべての富を入手したことに等しい」と述べています。毛沢東の言葉からも、満州国は、素晴らしい国になっていたのです。今回はこのくらいにして、正しい近現代史を学んで英霊に名誉を又日本人としての誇りを取り戻そうではありませんか。

参考文献

- まぼろしの満州国 神尾式春
- 世界史のなかの満州帝国 宮脇淳子
- 日本を賤しめる『日本嫌い』の日本人 渡部昇一
- 週刊新潮 09・8・13 「変見自在」 高山正之
- 日本人が知らない満州国の真実 岡田英弘 等



満州国 ハルピンのモストワヤ街(珍しいカラー、一般にはまだカラーは広まっていない時代です)1940年頃？ 当時ハルピンには 3000 名を超える日本人が住んでいたようです。日本の支援は素晴らしく、歩道にブロックが敷き詰められている。